

慶應義塾大学 大学院

文学研究科

2026



GRADUATE SCHOOL OF
LETTERS

永い歴史と伝統をベースに、 新しい人文科学の研究へ

研究科委員長からのメッセージ

人文科学研究の魅力をみなさんとともに

慶應義塾大学大学院文学研究科(修士課程および後期博士課程)には、9つの専攻のもと、16の専門分野——哲学、倫理学、美学美術史、アート・マネジメント(修士課程のみ)、日本史学、東洋史学、西洋史学、民族学考古学、国文学、日本語教育学(修士課程のみ)、中国文学、英米文学、独文学、仏文学、図書館・情報学、情報資源管理(修士課程のみ)——と、分野横断的な西洋中世研究コースがあり、あわせて200名以上の大学院生が日々、研鑽に励んでいます。人文科学のさまざまな学問分野を包摂しつつ、それぞれの分野の研究における高度な専門性を培う研究教育機関として、国内はもちろん、海外においても高く評価されています。

人文科学の探究は、古くから、人間社会の歩みと軌を一にしてきました。時代の推移や社会の変化、また価値観がさまざまに変容する中であって、人間社会の状況とそのあり方をできる限り具体的に、かつ、できる限りトータルに把握すること——それが、人文科学の魅力であり、使命であり、そして現代社会への重要な貢献であると思います。人間の置かれた状況を正確に、かつ多様な視点から理解することができれば、社会の進むべき方向は見えてきませんが、そうした状況の正確な把握や多様な視点は、一時的な流行や風潮によって得られるものではありません。現在と過去を往還しつつ未来を構想し、多様な文化のあり方のエッセンスを探究する人文科学研究の営為は、それゆえ、現代の人間社会において貴重な輝きを発し続けているのではないかと考えています。

慶應義塾大学大学院文学研究科には、こうした人文科学の探究に資する多くの制度や施設、研究教育体制が備わっています。各分野の第一人者である教員による授業の大半は

少人数の演習が中心で、当該分野における高度な専門性を確実に培うことができます。指導教授を中心とした修士論文や博士論文の指導は体系的におこなわれており、質の高い学位論文を完成させて学位(修士、博士)を取得する大学院生は、毎年、あわせて60名ほどに上ります。学内の他の研究科とのデュアルディグリープログラムをはじめ、文学研究科が基盤を置く三田キャンパスにある言語文化研究所、附属研究所斯道文庫、福澤研究センター、アート・センター、日本語・日本文化教育センター、ミュージアム・コモンズなどとの連携による領域横断的な研究を進めることもできます。豊富な和漢洋の貴重書に恵まれ、かつ最新の研究成果を日常的に享受できる多くのデータベースを有した国内屈指のメディアセンター(図書館)も大いに活用してください。また、こうした学びを支える各種の奨学金や研究助成の制度がきわめて充実しているのも重要な特徴と言えるでしょう。文学研究科では海外の大学院への留学や国際学会での発表を推奨しており、研究を効果的に進める上で有効な留学実績を毎年多く残していますが、そうした留学や渡航、海外での調査のための支援制度も充実しています。一般的な奨学金や研究助成に加えて慶應義塾大学独自の支援制度が数多くありますので、ぜひご確認ください。

慶應義塾には、その草創期から、「半学半教」という精神が脈打っています。特に大学院では、学生のみなさんを、教員とともに学ぶ者、大学院生どうしが教え合い、また教員の研究にも大きく資する研究者・教育者として位置づけています。学問研究を志す多くのみなさんとともに、人文科学の研究教育をさらに深く、そして大きく、この文学研究科において展開して行けることを願ってやみません。

CONTENTS

- | | | | | | |
|---|---|----|-------------------------------|----|--------------------|
| 2 | 研究科委員長からのメッセージ | 9 | 国文学専攻
(国文学／日本語教育学) | 14 | 大学院生の研究 |
| 3 | ディプロマ・ポリシー
カリキュラム・ポリシー
アドミッション・ポリシー | 10 | 中国文学専攻 | 15 | 教員の研究 |
| 5 | 哲学・倫理学専攻
(哲学／倫理学) | 10 | 英米文学専攻 | 16 | 科学研究費(学術振興会)の採択課題 |
| 6 | 美学美術史学専攻
(美学美術史学／アート・マネジメント) | 11 | 独文学専攻 | 17 | 学位 |
| 7 | 史学専攻
(日本史学／東洋史学／西洋史学／民族学考古学) | 11 | 仏文学専攻 | 18 | 進路・留学 |
| | | 12 | 図書館・情報学専攻
(図書館・情報学／情報資源管理) | 19 | 学費・奨学制度ほか |
| | | 13 | 修士課程「西洋中世研究コース」 | 20 | 入試日程・入試データ |
| | | | | 21 | Access Information |

文学研究科ホームページ
<https://www.gsl.keio.ac.jp/>

文学研究科委員長
原田 範行





幅広い関心やニーズに応える、 専攻と分野の広がりや深まり

3つのポリシー

大学院文学研究科では、専門研究者の育成をめざして、ディプロマ・ポリシー（学位に関する方針）、カリキュラム・ポリシー（科目構成に関する規定）、アドミッション・ポリシー（入学に関する方針）の3つのポリシーを掲げています。

修士課程

ディプロマ・ポリシー

大学院文学研究科では、課程修了時に学生が身につけるべき能力として以下のものを定め、学則に従って修了要件を満たした学生についてはこの能力を身につけた者と認め、修士の学位を与える。

1. 専門とする分野において、研究領域全般に関する専門知識を身につけ、適切な研究方法とそれぞれの専門において必要となる諸言語を駆使して専門的な研究を展開し、その成果を母語や外国語で発表することができる。
2. 専門とする分野における特定テーマに関して修士論文を執筆し、さらに、修士論文のテーマに関連する領域については包括的な専門知識を有し、その領域の研究に貢献をすることができる。
3. 専門研究を通じて人間、文化、社会を考える力を持ち、重要な問題や課題を認識し、それを解決するための議論や実践に資する研究能力を有することで、高度なリテラシーと批判的分析能力を備えた研究者、教育者、実務家として社会に貢献できる。

カリキュラム・ポリシー

大学院文学研究科では、ディプロマ・ポリシーの達成を目的として以下のカリキュラムを編成する。

1. 文学研究科全体のカリキュラムの基盤として、各専攻・分野において修士課程の全在学期間を通じて履修可能な、母語ならびに外国語による少人数演習科目を設置する。
2. 修士論文の執筆を可能とするため、指導教員の個別論文指導と演習授業を通じ、研究テーマについての知識を深めるとともに、高度な研究能力および論述力を養う。また、修士論文中間報告会等の機会を設けて、複数の教員から指導を受ける機会を提供する。
3. 修士論文審査については、論文題目および主査（原則として指導教員）および2名の副査（専任教員）で構成される審査団の文学研究科委員会による承認、審査団による論文審査、審査団および関連教員による口頭試問を経て、最終的な審査結果を文学研究科委員会で審議、承認する。
4. 海外の大学院への正規留学によって取得した単位を修了要件に含めることを、単位数を限って認める。また、文学研究科独自の支援制度により留学を援助する。
5. 海外への留学等を念頭において、より柔軟な履修を行えるように全ての科目は半期科目として開講する。
6. 領域横断的な研究を可能とするために、慶應義塾大学大学院の他研究科および付属研究所の設置科目、さらに文学研究科と提携関係にある他大学院の設置科目を修了要件として履修することを、単位数を限って認める。

アドミッション・ポリシー

大学院文学研究科では、次のような資質を持つ学生を求めている。

1. 卒業論文執筆や専門科目の履修等を通じて自身の専門領域についての理解を深め、専門とする領域全般についての基礎知識を有している。
2. 大学院において何をどのような方法で研究したいのかという研究計画、あるいは専門的な知識やスキルの修得をキャリアにどのように活かせるかについて具体的な計画を自ら考え、まとめることができる。
3. 諸言語の一次資料および二次資料を正確かつ批判的に読むことができる基礎的な読解力、学術的内容を的確に論じることができる基礎的な表現能力を身につけている。
4. 修士課程修了後の研究者、教育者、実務家としてのキャリアについて、積極的に考えている。

後期博士課程

ディプロマ・ポリシー

大学院文学研究科では、課程修了時に学生が身につけるべき能力として以下のものを定め、学則に従って修了要件を満たし、博士論文審査に合格した学生についてはこの能力を身につけた者と認め、博士の学位を与える。

1. 専門とする分野の研究を内容として博士論文を執筆し、その論文を通じて、当該領域の研究に独創的な寄与を成すことができる。
2. 研究対象とする分野において、最新の研究動向や研究課題に精通し、包括的で深い専門知識を有し、母語や外国語で国際的に成果を発信してその分野の研究に独自の貢献ができる。
3. 専門研究を通じて人間、文化、社会を深く洞察する力を持ち、重要な問題や課題を発見し、それを解決していくための高度な研究能力を有することで、高度なリテラシーと批判的分析能力を備えた研究者、教育者、実務家として社会に独自の貢献ができる。

カリキュラム・ポリシー

大学院文学研究科では、ディプロマ・ポリシーの達成を目的として以下のカリキュラムを編成する。

1. 専門とする分野の研究に独創的な貢献をする博士論文の執筆を可能とするため、指導教員が担当する科目を中心とした履修を行うとともに、指導教員が中心となって個別に論文指導を行い、高度な研究能力を養う。
2. 博士学位取得のためには、学生は専攻、分野が定めた博士論文執筆資格審査に合格し、博士論文を文学研究科委員会に提出して受理される必要がある。さらにその後1年以内に、文学研究科委員会で承認された主査および副査によって論文が審査され、文学研究科委員会に報告された審査報告に基づき、文学研究科委員全員の投票によって合格しなくてはならない。
3. 専門とする領域において最新の研究動向や研究課題に精通し、独自の貢献をするために必要な高度な研究能力を養成するため、後期博士課程の全在学期間を通じて履修可能な母語や外国語による少人数演習科目を設置し、その履修を修了要件とする。研究成果を学会や学術専門誌で発表することを目的として具体的な指導を行う。
4. 文学研究科ならびに慶應義塾大学国際センター等を通じての留学を推奨する。また、文学研究科独自の支援制度により留学を援助する。
5. 海外への留学等を念頭において、より柔軟な履修を行えるように、全ての科目は半期科目として開講する。
6. 研究分野のより専門的な研究を可能とするために、海外の大学院への正規留学によって取得した単位を修了要件に含めることを、単位数を限って認める。
7. 後期博士課程の学生の高度に専門的な研究を推進するために、海外の著名な研究者に副指導教員としての指導を依頼し、文学研究科委員の指導教員との共同指導のかたちで博士論文を準備することができる。

アドミッション・ポリシー

大学院文学研究科では、次のような資質を持つ学生を求めている。

1. 自分の研究領域および関連分野について、高度な専門的知識を有している。
2. 修士課程における専門的研究をふまえて、博士論文につながる独創性のある具体的な研究計画を自ら考え、まとめることができる。
3. 外国語の資料を正確かつ批判的に読むことができる分析的な読解力、学術的な論述力を身につけている。
4. 後期博士課程修了後の研究者、教育者、実務家としてのキャリアについて、積極的かつ具体的に考えている。

哲学分野

哲学分野は、文学研究科に設置されて以来一貫して西洋哲学を追求し、日本の哲学研究の中核を担ってきました。哲学は最も古い学問ですが、その長い伝統と先端の両方を兼ね備えているのが本分野です。哲学のすそ野は広大で、すべてをカバーすることはできませんが、伝統と現代の二点に研究の焦点を定めた点に特徴があります。スタッフは古典研究と現代研究に重点を置いた陣容になっています。院生は、修士課程と後期博士課程にそれぞれ十数名が在籍し、他大学や他学部からの入学者も珍しくありません。

本専攻の伝統の一つは古代ギリシア・中世の古典研究にあり、プラトン、アリストテレスから中世哲学まで幅広い領域をカバーできる、国内の大学では珍しい充実した陣容となっています。そこでは古代ギリシア語やラテン語が飛び交い、哲学の原点にある諸問題が議論されます。もう一つの伝統は、二十世紀以降の現代哲学の研究です。そのなかでは論理学や言語哲学、科学哲学、現象学といった新しい潮流はもちろんのこと、形而上学や認識論などの古くからの領域もアップデートされ、分野の垣根を越えた探求が日々進められています。

大学院の授業は、修士課程では修士論文、後期博士課程では博士論文という目標のために、必要な語学や哲学の基本ツールを修得し、さらにそれを磨く場となっています。また、学生は学内外での研究に積極的に参加し、学内における三田哲学会の例会、MIPS(三田哲学会の哲学・倫理学の合同研究集会)での発表、機関誌『哲学』への論文執筆のほか、各々の専門と関連する全国学会での発表、論文投稿など、活動の機会は大きく広がっています。他方で、さまざまな研究プロジェクトも展開されており、教員だけでなく多くの学生もその研究の一端を担う形で参加しています。

また、専任教員と学生の関係にも良き伝統が生きています。相互の信頼を基礎に日々の研究が進められていることはもちろん、授業以外での共同研究、さらには人間的なふれあいも随所に見られます。学生同士での勉強会も多く、相互啓発が活発に行われています。

教員紹介

担当者		専門分野	担当者		専門分野
教授	荒畑 靖宏	現代ドイツ語圏の哲学 哲学的論理学	教授	柏端 達也	行為論 現代形而上学
ARAHATA, Yasuhiro			KASHIWABATA, Tatsuya		
教授	上枝 美典	西洋中世哲学	教授	平井 靖史	時間と心の哲学 記憶の形而上学
UEEDA, Yoshinori			HIRAI, Yasushi		ベルクソンおよびライ ブニッツを中心とする 近現代哲学

倫理学分野

倫理学分野は、哲学分野とともに長い歴史を有しています。哲学とは別に倫理学を専門分野として設けている大学院は全国でもわずかしがなく、その中でも、本分野は最大規模のスタッフを擁しており、日本における倫理学研究の拠点の一つになっています。

倫理学分野のスタッフがカバーしているのは、近現代のドイツ、フランス、イギリス、アメリカの思想です。発足以来、この領域に重点を置きながら、スタッフをバランスよく配しています。また、現代の倫理学は規範倫理学・メタ倫理学・応用倫理学に大別されますが、本分野では、規範倫理学はもちろん、メタ倫理学や応用倫理学の研究・教育も行っています。さらに、宗教哲学、社会哲学など、倫理学と密接に関連する領域についても、長年にわたり、研究と教育を行っています。

スタッフの具体的な専門分野は、カントの倫理学、現代フランスの思想、近代イギリスの倫理思想、医療倫理学、メタ倫理学などです。他の領域については、毎年、専門の研究者を講師として招いており、倫理学について広く研究することができます。

倫理学分野は少人数教育をとくに重視しています。例年、修士課程には8名程度、後期博士課程には4名程度の大学院生が在籍しており、それぞれの問題関心に従って専門研究を進めています。修士課程では、研究者としての基礎を養い、優れた修士論文を執筆することを目標としています。後期博士課程では、学会や研究会での口頭発表や論文執筆などを通じて、研究者としての能力を高め、研究成果を博士論文としてまとめることを目標にしています。修了者の多くは研究者の道に進みますが、大学院で得た専門知識を活かして社会で活躍する人も数多くいます。

教員紹介

担当者		専門分野	担当者		専門分野
教授	荒谷 大輔	現代フランス思想 精神分析	教授	柘植 尚則	イギリス倫理思想史
ARAYA, Daisuke			TSUGE, Hisanori		
教授	エアトル ヴォルフガング	倫理学史 形而上学 現代倫理学			
ERTL, Wolfgang					

慶應義塾における美学美術史学の歴史は、1892(明治25)年に開講された森鷗外の「審美学」にまで遡ります。当初は美学および西洋美術史から出発しましたが、その後、日本・東洋美術史、西洋音楽史、音楽が関わる舞台芸術一般を研究領域に加え、近年は芸術組織運営、芸術支援などの研究・教育にも積極的に取り組んでいます。

すなわち本専攻には、理論研究(美学・芸術学)、歴史研究(美術史・音楽史・舞台芸術史・現代芸術論)、実学研究(アート・マネジメント)の3つの柱があります。2005(平成17)年度には、この3つの柱を下記の2つの分野に集約し、より充実した教育が行える体制を整えました。なお学生は、在籍する分野と異なる分野に設置された科目を一定の範囲内で履修し、修了に必要な単位とすることが可能です。

美学美術史学分野

美学美術史学分野は、理論研究、歴史研究を行う分野です。美学・芸術学、日本・東洋美術史、西洋美術史、西洋音楽史、舞台芸術史、現代芸術論が研究教育の範囲となります。専任者のほか若干名の非常勤講師が授業を担当し、幅広い分野をカバーしています。修士課程では修士論文の作成が必須です。また、後期博士課程では専門研究者として内外で活躍する人材の養成を目指し、学位論文(課程博士)提出により博士学位を取得する道が用意されています。

アート・マネジメント分野

アート・マネジメント分野は、芸術経営において必要とされる諸領域の知識、先導的なスキル獲得とプロフェッショナル養成を目標とした分野です。大学卒業後3年以上が経過し、実務経験を有する社会人が対象となります。授業内容は、非営利組織論、組織理論と組織行動論、マーケティング、ファンドレイジング、文化政策、芸術関連法規、ケース・メソッドなどから構成され、専任者のほか各領域で活躍する講師が教育にあたります。現在、開設されているのは修士課程のみで、社会人の学生のために平日夜間と土曜に集中して開講しています。修了には修士論文の作成が必須です。

教員紹介

担当者		専門分野	担当者		専門分野
教授	金山 弘昌	西洋美術史	教授	西川 尚生	音楽学 西洋音楽史
KANAYAMA, Hiromasa			NISHIKAWA, Hisao		
教授	後藤 文子	西洋美術史	教授	福田 弥	音楽学 西洋音楽史
GOTO, Fumiko			FUKUDA, Wataru		
教授	内藤 正人	日本美術史	教授	望月 典子	西洋美術史・芸術学
NAITO, Masato			MOCHIZUKI, Noriko		
教授	中尾 知彦	アーツ・マネジメント			
NAKAO, Tomohiko					



日本史学分野

史学専攻では、歴史を個々の人間の営為の積み重ねととらえ、歴史を学ぶことは、人間とその生きた社会を知ることと位置づけています。そのために、時には対象とする地域や時間、あるいは、旧来の学問の枠を越え隣接科学の成果も踏まえるなど、より多くの学びを求めています。

特に日本史学分野で重視しているのは、日本史の研究を国内史に狭くどめることなく、国際的な視野に立って検討することと、現代の目から見るだけでなく、その時代の人々の視点や思考に即して歴史を捉えるように努めることです。古代の社会を日中の史料の比較から、中世の経済を東アジアの交易圏に組み込まれた形で、キリシタン時代の社会を地球規模の動きの中で、「鎖国」時代の国内問題を国際関係の視点から、近代の国内市場の動向を植民地・諸外国に向けた対外取引との連関に注目しつつ、それぞれ捉えるのが、前者の例としては分かりやすいでしょう。古代の人々の仏教との関わり方を階層ごとに掘り取る、中世の人々の貨幣観念を復元する、近世の人々の多様な信仰の実態を探る、近代の地域経済をその担い手である商人や農民の活動から掘り下げ発展の構造を分析するなどの研究は、後者の方向性から生まれてくるものです。

いずれにしても学生は、歴史学のもつ広範な領域と方法を学ぶことになるはずです。そして、このような目的を達成するために良質な史料を活用し、それにより実証的な研究を進めるよう指導しています。大学院修了後には、学界などでも広く通用する日本史研究者や博物館学芸員、中学校・高等学校で教鞭をとる歴史教育者を育成できるよう努力しています。

授業は7名の専任教員と若干名の非常勤講師が担当しています。修士課程では毎年10科目前後が開講されています。それらは史料講読を中心とする科目(日本史特殊講義演習、古文書学特殊講義)と、講義を中心とする科目(日本史特殊講義)に大別され、修士論文の作成が必修とされています。また、後期博士課程では研究論文の作成支援を行うほか、史料講読を主とする日本史特殊研究が5科目前後開講されています。後期博士課程の学生には、学位論文(課程博士)を提出して博士(史学)の学位を取得する道が開かれています。

修士課程と後期博士課程とともに、古代から近現代に至るまで各時代の科目を満遍なく開講し、可能な限り多様な対応を試みています。授業はいずれも学生5〜6名前後の少人数で行われ、授業科目によっては史料調査、博物館・文書館・遺跡の見学などを行います。

教員紹介

	担当者	専門分野		担当者	専門分野
教授	浅見 雅一 ASAMI, Masakazu	キリシタン史 中国天主教史	教授	中島 圭一 NAKAJIMA, Keiichi	日本中世史
教授	小山 幸伸 KOYAMA, Yukinobu	日本近世近代社会経済史			

東洋史学分野

東洋史研究の対象は一般的にアジアと呼ばれる地域ですが、問題設定の方法、時代によってはアフリカやヨーロッパもその視野に入ってきます。中東イスラーム世界の歴史研究を志す人にとって、マグリブやバルカンも重要地域であり、華人のネットワークに興味をもつ人は、アジアのみならずアメリカやヨーロッパも視野に入れなければなりません。

東洋史の魅力は、このような広大な対象地域にあるといっても過言ではありません。しかし、専門性を重視する大学院においては、広く浅く学ぶというやり方は避けなければなりません。そこで東洋史学分野では、これまでの学問的な伝統と、史料を読むツールとしての語学などとの関係から、以下のように対象を東西二つの領域に分けています。それぞれの領域で完結性の高いカリキュラムを組み、深く学べるようになっています。

一つ目の領域は、中国を中心とする東アジア史研究です。ここには中国古代史研究と、史料を重視する実証主義史学や文献史学の伝統に基づく、明清から人民共和国期にかけての中国近現代史研究が含まれます。前者は松本信広以来の学統である民俗学的手法を取り入れたもの、後者は明治から大正期にかけて日本を代表する東洋史学者であった、田中萃一郎によって切りひらかれたものです。また、日本と中国および世界の華人ネットワークを視野に入れた都市社会史や文化交流史も、もう一つの柱になっています。

二つ目の領域は、アラブ、トルコ、イラン、中央アジアなどの中東イスラーム世界史研究です。かつてこれら諸地域の研究は、中国の辺境史としての位置づけしか与えられてきませんでした。しかし、今では世界をとりまく情勢が変わり、緊急にして最重要な分野として誰もが認めるようになっています。本塾ではこの分野におけるパイオニアである前嶋信次、井筒俊彦の学統を継承しながら、アラブでは社会史研究に、非アラブではオスマン帝国史研究に重点をおきながら研究・教育を行っています。

以上は教員サイドから見た特徴と言えるものですが、院生は基本的に自分の好きなテーマで研究が行えるようになっています。自分の頭と身体でアジアを知り、師を越えるという気概を持ち、自らの手で新しいフロンティアを探りあて社会に巣立って欲しいという思いがあるからです。そのために、外部から多彩な講師陣を招いて知的刺激の拡充に努める一方、社会に出てから場合によっては欧米系の言葉以上に有力な武器となる、東西のアジア系諸言語を存分に学べるカリキュラムが用意されています。

教員紹介

	担当者	専門分野		担当者	専門分野
教授	岩間 一弘 IWAMA, Kazuhiro	東アジア近現代史 食の文化交流史 中国都市史	教授	藤木 健二 FUJIKI, Kenji	オスマン帝国史 トルコ史 中東都市社会史
教授	長谷部 史彦 HASEBE, Fumihiko	中東社会史 アラブ都市史 地中海交流史			

西洋史学分野

西洋史学分野の修士課程では、以下に紹介する教員の個別研究分野よりやや広い分野で、一次史料や基礎的研究文献を講読し、基礎知識の獲得を目指します。後期博士課程では、身につけた基礎知識を前提として、さらに高度な研究能力を養成します。そして、学位論文の作成を通じて研究者を育成することを目標とします。西洋史は、時間的・空間的に膨大な領域を対象とします。しかし、学部教育と違い大学院、特に後期博士課程では、学生の研究分野と教員の指導できる分野が近接していなければなりません。そういった意味から、以下に各教員の個別研究分野をやや詳しく紹介しますので、参考にしてください。

赤江雄一は、中世ヨーロッパ宗教史および中世イギリス史を専門としています。活版印刷すら存在しなかった中世ヨーロッパにおける大量言説普及装置(マス・メディア)であった説教に注目することで、当時の社会のこれまで知られていなかった側面を明らかにする研究を、ラテン語および中世英語の写本史料を用いておこなっています。

清水明子は、ドイツ、バルカン現代史を専門にしています。現在は、ナチス・ドイツのヨーロッパ広域秩序構想と大クロアチア国民国家建設の接点における、権力関係と社会的変容の再構成に取り組んでいます。

野々瀬浩司は、スイス及び西南ドイツの宗教改革期を対象に、宗教改革の思想的背景、神学上の諸問題、さらには農奴領主制の変化などを研究していましたが、最近は都市と宗教改革の関係について調べています。

山道佳子はカタルーニャの近代社会文化史を専門にしています。現在は18世紀後半から19世紀前半のバルセロナにおける絹を扱う手工業者とその家族を主な対象とし、労働とジェンダーのあり方や地理的社会的モビリティについて、遺言書や結婚契約書、死後財産目録、徒弟契約などの公証人文書から明らかにする研究に取り組んでいます。

長谷川敬は、古代ローマ社会経済史を専門とし、特にカエサル征服後のガリアやローマ領ゲルマニアの商人、職人、運送業者が、どのような人的ネットワークを構築していたのかを、主に碑文史料から明らかにすることを目指しています。

館葉月は、近現代フランス史と国際関係史を専門とし、スイス・ジュネーヴに拠点を置く赤十字国際委員会の活動をつうじて、第一次世界大戦期とその後のヨーロッパにおける人道主義の展開を研究してきました。また、未曾有の規模になった戦争が終結後も長く社会の様々な面に与え続けた影響を、フランス社会を対象に考えています。

教員紹介

	担当者	専門分野		担当者	専門分野
教授	赤江 雄一 AKAE, Yuichi	西洋中世史	教授	野々瀬 浩司 NONOSE, Koji	スイス宗教改革史 農村社会史
教授	清水 明子 SHIMIZU, Akiko	ドイツ現代史 ユーゴスラヴィア史	教授	山道 佳子 YAMAMICHI, Yoshiko	スペイン(カタルーニャ)近代史

民族学考古学分野

民族学考古学分野では、フィールドワークに基づいて集積された一次資料を利用して、過去の社会や民族文化の歴史的再構成を行います。主な研究指導対象分野としては、日本の先史考古学、歴史考古学、西アジア考古学、太平洋地域の考古学・歴史人類学、動物考古学、ジオ考古学、考古学研究法、自然人類学などが挙げられます。また、考古・民族資料コレクションの形成をめぐる博物館学・博物館人類学的研究も行っています。

大学院教育としては、担当教員による個別の論文指導および教員・学生全員が参加する演習授業による研究発表や討論が中心となっています。教員はそれぞれ専門のフィールドを持っていますので、各フィールドの調査に参加し、野外調査の実践・分析・報告の仕方を学ぶことができます。また、学会等における発表を推奨し、そのための指導が行われています。

本分野では、長年の調査で蓄積された豊富な考古・民族・古人骨資料が保管されていますので、それらをもとに研究を進めることも可能です。総合大学の研究科として、他学部・他専攻・諸研究所と連携し、アッカド語やヘブル語などの特殊言語、自然科学的手法、統計的解析手法を習得することができます。最終的には、独自の研究を仕上げることで、総合的リサーチ・デザインを描ける研究者の養成を目指しています。

教員紹介

	担当者	専門分野		担当者	専門分野
教授	安藤 広道 ANDO, Hiromichi	日本考古学 博物館学	教授	山口 徹 YAMAGUCHI, Toru	オセアニア島嶼世界のジオ考古学 歴史人類学 博物館人類学
教授	河野 礼子 KONO, Reiko	自然人類学	教授	渡辺 丈彦 WATANABE, Takehiko	旧石器考古学 日本古代史 文化財行政学
教授	佐藤 孝雄 SATO, Takao	動物考古学 民族考古学			



国文学分野

国文学専攻は、日本の文学・言語・文化を総合的且つ専門的に探求する場です。現在の専任教員スタッフは、附属研究所斯道文庫を含めて、文献学的学問を志す者が少なくありませんが、個々の教員の関心は一つの研究方法に止まってはいません。研究対象も、一人の教員が多くの分野・作者・作品・文学的語学的事象に関心を抱いています。

国文学の研究対象となる時代は古代から近現代まで、ジャンルは古典に属する和歌・物語から近現代の小説や出版文化に至るまで多種多様です。日本語学も古代語から現代語まで、理論的研究から実証的研究まで多岐に互ります。国文学専攻では、近年の傾向として、中古物語、中世和歌、絵巻物・絵入り本、近代ジェンダー・セクシュアリティ論、形態音韻・文字表記、日本漢文学といった研究が盛んです。

授業は、専任教員・斯道文庫教員・非常勤講師により、それぞれの専門分野を中心として、さまざまな形式で行われています。その多くは、少人数による演習形式を取っています。

一方、大学院の行事としては年2回、5月と11月に国文学研究会を開催しています。これは大学院在籍者・出身者による研究発表を中心に、若手研究者の研鑽の場としての役割を果たしています。また、文学系5専攻の運営する藝文学会でも、6月の大会では大学院生による研究発表が行なわれています。このほか、専任教員の主宰する研究会・読書会も頻繁に開かれています。大学院生の論文発表の場としては、国文学専攻の『三田國文』(年1回)、藝文学会の『藝文研究』(年2回)があります。

大学院修了後は、中学・高校の教員、大学の教員、公共機関の研究員などの専門職に就く者が圧倒的に多く、民間企業に就職する者は極めて少数です。

教員紹介

	担当者	専門分野		担当者	専門分野
教授	小川 剛生 OGAWA, Takeo	中世文学 和歌文学	教授	合山 林太郎 GOYAMA, Rintaro	日本漢文学(近世・近代)
教授	小平 麻衣子 ODAIRA, Maiko	近代日本文学			

日本語教育学分野

慶應義塾大学における日本語教育は1958(昭和33)年に開始されました。その後1972(昭和47)年、学生ならびに修士課程修了者を対象に、日本語教師養成を目的とした「日本語教授法講座」が、本塾国際センターに開設されました。この講座は、2003(平成15)年に改編によって日本語・日本文化教育センター設置「日本語教育学講座」となりますが、約30年にわたり数多くの日本語教育の指導者、研究者を世に送り出してきました。その実績を踏まえ、2007(平成19)年、大学院文学研究科国文学専攻に日本語教育学分野が創設されました。本分野の目的は、高度専門職業人として専門的かつ体系的な知識を備え、優れた教育技能を有する日本語・日本語教育の専門家を養成することにあります。

日本語教員を目指す日本人学生、外国人学生の要望に応えるべく設置された本分野は、大学院から日本語教育学を学ぶ人、現場で日本語教育を経験し日本語研究を希望する人、他分野で取得した修士号とあわせ、日本語教育学でも修士号の取得を目指す人たちに対し、広く門戸を開放しています。

研究活動は、さまざまな理論を教育現場にどのように生かすか、実践をどのように体系化していくかといった、理論と実践を結びつけることに主眼を置いています。主な教授陣は本塾の留学生教育の拠点である、日本語・日本文化教育センターにおいて日本語教育を行っている教員ですので、講義・演習においても理論に偏らない、教育現場の観点を重視した教育・指導が行われています。また、日本語・日本文化教育センターの協力のもと、日本語教育現場の見学、異文化交流など、教育・研究に結びつくさまざまな経験の機会も設けられており、きめ細かい指導が可能となっています。

将来、高度専門職業人としての日本語教育者・研究者を目指す、意欲と熱意のある人を待っています。出願資格、入学試験、カリキュラム、修了要件等は、履修案内と入試要項を参照してください。

教員紹介

	担当者	専門分野		担当者	専門分野
教授	大場 美穂子 OHBA, Mihoko	日本語学 日本語教育学	教授	田中 妙子 TANAKA, Taeko	会話分析
教授	木村 義之 KIMURA, Yoshiyuki	日本語学			

中国文学専攻は、「中国古典文学」「中国現代文学」「中国語学」を大きな3本の柱としていますが、中国の歴史、哲学、社会、芸能などを含めた、古代から現代にいたるまでの幅広い中国の文化全般を研究対象としています。

歴史を遡れば、本専攻は中国文学研究の泰斗・奥野信太郎の学風に導かれ、伝統を形成してきました。専任教員の専門分野は、古典文学、現代文学、語学に分かれています。また、特殊な研究領域においては、優れた業績を有する斯界の専門家を非常勤講師として招き、より充実した教育を行える体制を整えています。

修士課程では、中国文化全般について幅広く学ぶと同時に、自ら選択したテーマを深く掘り下げて追究し、修士論文を作成します。後期博士課程では、修士課程で獲得した基礎知識を土台に、より専門的な研究を行い、学会にその成果を発表します。

近年の学生の意欲的な姿勢のあらわれとして、在学中に長期留学する傾向が強くなっています。大半の学生が1年ないし2年の留学を経験し、きわめて大きな成果をあげています。留学先は主に中国本土や台湾などで、現地の大学で専門の研究に取り組むほか、中国語運用能力の向上をはかり、また現地での生活を通して中国の風俗、習慣、文化などについての理解を深めています。

修了後の主な進路は、中学・高校の教員や大学の教員、研究機関の研究者などです。開設以来、中国語学・中国文学の教育・研究分野で活躍する人材を数多く輩出してきました。世界における中国の躍進に伴い、官公庁や一般企業で活躍する人材も増えており、今後の展望も大きく開かれています。スタッフ一同、意欲ある皆さんとの出会いを期待しています。

教員紹介

	担当者	専門分野		担当者	専門分野
教授	浅野 雅樹 ASANO, Masaki	中国語学	教授	吉永 壮介 YOSHINAGA, Sosuke	中国古典文学
教授	杉野 元子 SUGINO, Motoko	中国近現代文学 日中比較文学			

英文学・米文学・英語学(英語史、言語学)及びそれぞれの関係領域を研究対象とする英米文学専攻では、西脇順三郎・厨川文夫の伝統に連なる中世英文学・英語学、大橋吉之輔の衣鉢を継ぐアメリカ文学を中心に、伝統を踏まえながら、現代の最も新しい分野、例えば書物史や現代批評理論なども視野に入れ、国際的な学問的貢献を目指しています。

修士課程2年間で基本的なディシプリンを積み、後期博士課程の3年間で博士論文を提出できるように、きめ細かな指導を行っています。担当者は教授7名(英文学3名、米文学2名、英語史・言語学2名)で、他に文学部、言語文化研究所、他学部所属の専任教員も授業を担当しています。多彩な設置科目はすべて選択科目で、学生の研究領域に合わせて指導教員と相談しながら履修するシステムが確立しています。必要に応じて学界の第一線で活躍する学者を国内外から講師として迎えます。日本英文学会をはじめとする各分野の主要学会での研究発表、レフェリー制度をもつ学術雑誌への投稿、共同研究に基づく共著の執筆、外国への留学とそこでの学位取得に関するガイダンスの機会も数多くあります。さらに、博士号請求論文のレベルを高く維持するために、しばしば著名な外国人研究者を審査員に招いています。その審査を通過した論文は続々と公開されており、慶應義塾での修士・博士論文が海外で出版されたり国際的な学術誌に採択されることは、分野を問わず珍しくありません。

また、後期博士課程在学中には日本学術振興会特別研究員としての採用や学位取得のための海外留学を支援し、課程修了後は非常勤講師として教歴を身に付けてもらうようにしています。ほとんどの場合、学位取得後は大学の常勤教員として就職します。

現在学内で進んでいる大学院生を交えた研究プロジェクトには、西洋中世写本や初期刊本を対象としたテキスト校訂や書物史研究のためのプロジェクト、慶應アメリカ学会におけるアメリカ研究プロジェクトなどが含まれています。

学位請求論文の概要や専任教員の研究内容については、ホームページで紹介されています(<https://web.flet.keio.ac.jp/englit/>)。

教員紹介

	担当者	専門分野		担当者	専門分野
教授	井上 逸兵 INOUE, Ippei	英語学 社会言語学 談話分析	教授	徳永 聡子 TOKUNAGA, Satoko	中世イギリス文学 書物史 書誌学
教授	大串 尚代 OGUSHI, Hisayo	アメリカ文学 ジェンダー研究	教授	原田 範行 HARADA, Noriyuki	近現代イギリス文学 比較文学 出版文化史
教授	佐藤 光重 SATO, Mitsushige	アメリカ文学	教授	堀田 隆一 HOTTA, Ryuichi	英語史 歴史言語学
教授	高橋 勇 TAKAHASHI, Isamu	近現代イギリス文学 ファンタジー文学			

文学研究科公式サイト
<https://www.gsl.keio.ac.jp/academics/index.html>



各教員の研究内容等は、慶應義塾研究者情報データベースにてご確認ください。
<https://www.k-ris.keio.ac.jp/search?m=affiliation&l=ja&a2=0000001&s=1&o=title>



独文学専攻

German Literature

独文学専攻が研究対象としているのは、ドイツ語圏の広義の文化です。時代は中世から現代まで、内容はドイツ語学理論、文学理論、文化理論、テキスト講読、口語・文語表現演習、中世文化研究などで、カリキュラムが構成されています。伝統的な研究法から最新の研究動向にいたるまで柔軟に目配りしつつ、優れた研究者を育成し、高度な専門知識を身に付けた人材を社会へ送り出すことを目指しています。

修士課程においては、徹底的にドイツ語と学問的思考法の習熟を目指します。文学系、文化系、言語学系、哲学・思想系の各テキストの読解と討論、学問的議論のための実践的な口語演習、修士論文作成のためのドイツ語による論文執筆訓練などを課しています。また、少人数のクラスでは教員と学生の間で密度の高い授業が行われます。後期博士課程においては、主に博士論文執筆のための授業が行われ、指導教授による指導と並行して自主研究を進めることとなります。独創的な発想や発見を根底に据えた、個性的な博士論文の作成が期待されます。博士学位の取得に関しては、本専攻の定めた規定に準じて審査が行われるので、別途資料を請求していただきます。

また、慶應義塾大学はドイツ学術交流会の一般考査による留学や、ベルリン自由大学、ボン大学、ドレーズデン工科大学、ザールブリュッケン大学、デュッセルドルフ大学、ジーゲン大学、ライプツィヒ大学、アーヘン工科大学などとの交換協定による留学生派遣を行っています。オーストリアやスイスの大学へ留学する学生もいます。独文学専攻とドイツ語圏主要大学との連携の強化により、絶好の留学環境にあると言えるでしょう。

以上のように、本専攻では多岐にわたる研究分野、母語話者によるドイツ語能力の陶冶、少人数制による個別指導の徹底、ドイツ語圏の諸大学との連携強化と留学制度の整備などを柱に活動しています。学生の進路は、公務員や一般企業への就職のほか、研究者となる者も数多くいます。

教員紹介

	担当者	専門分野		担当者	専門分野
教授	川島 建太郎 KAWASHIMA, Kentaro	現代ドイツ文学・思想 メディア理論	教授	平田 栄一郎 HIRATA, Eiichiro	演劇学 ドイツ演劇
教授	桑川 麻里生 KUMEKAWA, Mario	近現代ドイツ文学 文化史 スポーツ史	教授	ヨッホ マルクス JOCH, Markus	近現代ドイツ文学 文化学
教授	田中 慎 TANAKA, Shin	ドイツ言語学 言語理論			

仏文学専攻

French Literature

仏文学専攻は、修士課程が1951年(昭和26年)に、後期博士課程が1953年(昭和28年)に創設されました。すでに約70年の歴史と伝統を有することになります。院生は本塾文学部通学課程からの進学者のみならず、通信課程卒業生や他大学出身者なども広く受け入れています。学部を卒業し就職した後、一定の年月を経て大学院で再び学ぶケースもあります。

常時8名前後の教員が授業と論文指導に当たっています。日本人教員は全員がフランスで博士号を取得しています。担当教員の専門は文学と言語学を中心に幅広い分野にわたり、院生の多様な関心や要求に的確に対応できる態勢が整っています。また、院生の研究活動や留学に必要なフランス語の運用能力を育成するため、フランス人訪問教授による徹底した口頭発表の訓練や作文指導も行われています。

修士課程のカリキュラムには、幅広く多様な時代の文学や思想を扱う科目を中心に言語学やフランス語の運用能力を高める科目も設置されています。すべての設置科目を履修し、高度な語学能力を身につけながら、研究者としての視野を広げるよう院生を指導しています。修士課程での学習と研究の成果は修士論文として結実します。

後期博士課程の院生は、明確な研究テーマと方法論により独創性の高い研究活動が続けます。最終的には博士論文の作成と提出、博士の学位取得を目標とします。専攻内で定めた「博士学位請求論文の申請および審査に関する内規」に従い、博士論文が完成するまで指導教授が責任をもって指導に当たります。

毎年一回、秋頃に研究発表会が開催され、修士課程の院生は修士論文の構想を述べ、後期博士課程の院生は研究の進捗状況を報告します。また、研究成果を発表する場として、査読付きの論文集を年一回刊行しています。その編集作業は後期博士課程在学中の院生が担当し、さまざまな業務を体験できるよい機会となっています。

本専攻で扱う学問領域の性質上、院生には留学を積極的に勧めています。これまでに、本塾交換留学制度によりENS(高等師範学校)、ソルボンヌ・ヌーヴェル大学、コート・ダジュール大学、トゥールーズ第1大学などに留学生を送り出してきました。フランス政府給費留学生試験に合格した院生も数多くいます。

修了生は本塾をはじめさまざまな大学で教育や研究に従事しています。高等学校の教員になる者、一般企業や公的機関で働く者もいます。文壇や詩壇などでいわゆる三田派の伝統に連なる執筆活動を展開する小説家、詩人、批評家も少なくありません。

教員紹介

	担当者	専門分野		担当者	専門分野
教授	市川 崇 ICHIKAWA, Takashi	現代フランス文学及び思想	教授	築山 和也 TSUKIYAMA, Kazuya	19世紀フランス文学
教授	喜田 浩平 KIDA, Kohei	フランス語学	教授	岑村 傑 MINEMURA, Suguru	近現代フランス文学

図書館・情報学専攻

Library and Information Science

図書館・情報学分野
1967(昭和42)年に設置された図書館・情報学専攻は、情報システム、情報メディア、情報検索を研究の三つの柱としています。
情報システムは、情報を扱う組織全体を含めた広い概念で、方法的対象として図書館を扱います。図書館は資料を収集、組織化、保存、提供する機能を持ち、書誌コントロールや情報サービスなどの観点からも捉えることができます。また、図書館とその設置機関との関係をめぐる法的小よび経営的な問題、提供されるサービスと利用者コミュニティとの関係をめぐる社会的、心理的問題などが研究テーマになります。
情報メディアは、欧米の情報学の中で発展した学術コミュニケーション研究と計量書誌学に加え、情報探索行動の問題を含めた独自の研究領域を持っています。最近は、デジタルメディアの特性やそれらの利用者に関する研究、組織やウェブにおける人々の行動の理解、情報メディアを含めた知識の共有・創造・蓄積・サービスのデザインを考える研究も行われています。隣接領域である書誌学や出版、メディア論やメディア研究などの課題に取り組むことも可能です。
情報検索は、情報検索理論から情報組織化、データベース、情報検索システムまで、全体的な観点から研究課題を扱います。最近では、サーチエンジンの高度化、検索実験における評価方法、大量の文書の自動分類などの研究、あるいはメタデータ、統制語彙、分類法等とそれらの組み合わせからなる情報組織化／情報資源組織化の高度化などの研究が行われています。
修士課程の入学者は例年少人数であり、指導教授だけでなく、専攻の他の教員、修了生も含め和やかな雰囲気 で研究を進めていくことが可能です。修了後は、国立国会図書館や大学図書館などへの就職、情報通信関連企業への就職、後期博士課程への進学が多数を占めます。
後期博士課程では、博士学位の取得を目的とした論文作成指導が中心となります。査読のある学会誌に論文を発表した後、学位論文検討会で発表を積み重ねることを通じて、学位論文を完成させるように指導しています。博士課程修了後は、大学や研究組織の教員、研究職を目指す方が大部分です。
なお、2006(平成18)年からは、後期博士課程の科目を社会人の方に向けて夜間にも開講しています。

情報資源管理分野

社会の環境変化に伴い、図書館業務や情報サービスに従事する専門職のリカレント教育の必要性が高まっています。そこで2004(平成16)年、図書館・情報学専攻における教育の実績に基づき、社会的ニーズに応えるために情報資源管理分野を設けました。大学卒業後3年以上、図書館等における実務経験あるいは司書資格を有する方を対象としています。2015(平成27)年度文部科学省「職業実践力育成プログラム」に認定され、厚生労働省の教育訓練給付金(専門実践教育訓練)の支給対象ともなりました。

本分野は、最新の情報技術や経営管理を中心に、情報資源組織化や図書館評価、学術情報流通、レファレンスサービスなどについての知識や技能を修得し、問題解決能力の向上を図ることを目的としています。

現職者向けに平日夜間(月曜日と木曜日)と土曜日午後に開講しています。仕事を持ちながら修士の学位を目指す方が大半であるため、結束力もあり、修了後も交流が盛んです。

教員紹介

	担当者	専門分野		担当者	専門分野
教授	安形 麻理 AGATA, Mari	書誌学 書物史 図書館・情報学	教授	岸田 和明 KISHIDA, Kazuaki	情報検索 テキストマイニング
教授	池谷 のぞみ IKEYA, Nozomi	エスノメソドロジー 情報行動 知識の社会学			



修士課程「西洋中世研究コース」

「西洋中世研究コース」

文学研究科では、2021年度より、修士課程に「西洋中世研究コース」を設置しました。このコースは、西洋中世(古代末期から16世紀までのヨーロッパおよび隣接するイスラーム文化圏)を対象として領域横断的なテーマで研究をすすめたい大学院生のために、学生が所属する専攻の枠をこえて、各自の研究テーマにもっともふさわしい研究・指導環境を提供しようとするものです。

西洋中世の思想、美術、歴史、文学を所属する専攻内で専門的に研究することは言うまでもなく可能ですが、西洋中世研究はもともと領域横断的な性格を持った分野です。大学院生が構想する研究テーマが複数の領域をまたがることは少なくないでしょう。そうした関心の広がりにもふさわしい柔軟な指導体制のもとで、独創的な研究を後押しすることがコースの目的です。各自の研究テーマに応じて複数の教員が指導することを原則として、所属専攻の指導教授にくわえて他分野の専任教員が副指導教員のようなかたちで、修士論文の執筆を指導します。また、領域横断的な演習科目の履修を通じて、西洋中世を研究する他の学生とも交流しつつ、独自のテーマを深化させるための方法論や専門的知識を身につけることができます。本研究科の修士課程を修了し、かつコースの所定の修了要件を満たした場合、修士学位とともに「コース修了証(サティフィケート)」が授与されます。

コースへの参加は、大学院入学後に所属専攻の指導教授および関連するコース担当教員と個別に相談して決めます(コースに特化した入学試験はありません)。入学後ガイダンスを開催しますから、関心のある学生は参加してください。

西洋中世研究コースへの登録は、コースの対象となる専攻に2年以上在学する予定の修士課程の学生を対象としています。現在コースの対象となっている専攻は哲学・倫理学、美学美術史、史学(西洋史)、英米文学です。コース対象の専攻は、教員側の事情により変化する可能性があるので、年度毎に更新されます。

西洋中世研究コースで、論文指導や授業を担当する予定の教員は以下の通りです(詳しい紹介や教員の連絡先は文学部・文学研究科の公式ウェブサイトをご覧ください。<https://www.flet.keio.ac.jp/index.html>と<https://www.gsl.keio.ac.jp/index.html>)

教員		専門
上枝 美典	(哲学倫理学専攻哲学分野 教授)	西洋中世哲学
金山 弘昌	(美学美術史学専攻 教授)	西洋美術史
野々瀬 浩司	(史学専攻西洋史学分野 教授)	スイス宗教改革史、農村社会史
赤江 雄一	(史学専攻西洋史学分野 教授)	西洋中世史
徳永 聡子	(英米文学専攻 教授)	中世イギリス文学、書物史
堀田 隆一	(英米文学専攻 教授)	英語史、歴史言語学
井口 篤	(英米文学専攻 准教授)	中世イギリス文学

大学院生の研究



文学研究科 国文学専攻日本語教育学分野 修士課程2年(2024年度現在)
カク 学校

学びを支える環境

高校時代、私は日本のアニメの存在を知ったことをきっかけに日本語の世界に魅せられました。しかし、それはまだ趣味の範囲で、本格的に日本語への語学的な興味を深めたのは、大学で日本語を専攻し、その難しさに直面したときでした。それでも何とかそうした壁を乗り越えて大学を卒業した後に日本語教師として働き始めましたが、教育経験が乏しかったため、教え方に苦労する日々が続きました。そのような中、職場の同僚で日本語教育を専攻した方から多くのアドバイスをいただき、日本語教育を専門的に学ぶ必要性を感じるようになりました。このときが、私を日本留学と大学院進学へと導いたと言えます。私の人生にとっては大きな転機となりました。

現在、私は日本語教育学分野に所属し、「外来語と類義関係にある漢語の意味用法」をテーマに研究を進めていますが、修士課程の1年次に日本語学や日本語教育学の理論や方法論などを集中的に学び、2年次からは自分の研究テーマに専念できるカリキュラムとなっています。また、少人数制の授業で、先生と学生の距離が近く、研究についての悩みや疑問に対して丁寧な指導を受ける機会が非常に多いと実感しています。先生方の手厚く熱心なご指導のもと、自身の研究テーマを深めていくことができます。

慶應の別科日本語研修課程には日本語を学ぶ多様な国籍の外国人留学生がいるので、私も彼らのチューターとして、中国では経験したことがない日本語教育の現場を知ることができました。この貴重な経験を通じて、自分自身の研究課題や日本語力で不足している点を見つめ直し、学習者にとってよりわかりやすい日本語教育の方法を模索しています。将来日本語教師を目指す方にとって、慶應は理想的な学びの場だと確信しています。



文学研究科 哲学専攻哲学分野 博士課程1年(2024年度現在)
岡部 幹伸

現代哲学の最前線へ

私は分析哲学といわれる現代英語圏で主流の哲学のうち、知覚の問題を扱う知覚の哲学を専門にしています。また、分析的ドイツ観念論という最近の潮流の評価・紹介も関心事です。慶應は一般に哲学科としても、また分析哲学の伝統という意味でも国内有数なので、そこに身を置いて研究できることは大変幸運です。

普段は学会発表や論文投稿に向けて、英語(とドイツ語)の論文を読んで過ごしています。読書会や勉強会で、他大学も含めた友人や先輩・後輩と一緒に文献を読んだり各自の研究の検討をしたりします。そういった活動に慶應メディアセンターの電子資料は欠かせません。良くも悪くも、現代において哲学することは英語圏のジャーナルに載った論文を読むことが中心なので、簡単にPDFをダウンロードできる慶應の環境は非常に役立っています。

私は大学院に入ってから指導教員のゼミだけではなく、他の先生のゼミや授業にも出ていました。慶應は先生の数が多いという長所があつて、たとえば現代哲学を研究している人なら、分析哲学の各分野を深いところまでわかっている複数の先生の教えを乞うことができます。これはとても大きなメリットです。このような点は哲学・倫理学専攻だけでなく、慶應文学研究科の他の専攻でも言えることだと思います。大学院へ進んでその先の進路を目指す皆さんへ、私は慶應義塾大学大学院文学研究科をおすすめします。皆さんが慶應で最高の研究環境を手に入れることを願っております。

教員の研究



英米文学専攻
徳永 聡子 教授

中世英文学を書物文化史の観点から研究

現代社会ではスマートフォンやタブレット端末の普及が進み、読書の形態も多様化してきました。一方で、私たちが作品を享受するとき、それがどのような形態であっても、なんらかの媒体を介していることは普遍的です。作者が書いたものが読者や聴き手に届くまでには、それを「書物」として成り立たせる支持材料が存在します。また同じ作家の同じ作品であっても、標題紙や目次、挿絵の有無、書体や文字の大きさ、判型や形態など、書物によって特徴は異なります。さらにはメディアや時代の変化にともない、同じ作品のテキストが変わることも多々あります。つまり作品を読むということは、文字を辿って意味を抽出する行為にとどまりません。ロジェ・シャルチエの**ことばを借りる**ならば、「書かれたものの理解は、どんな場合でも、それが読者に達する際にまとう形態に部分的に依存する」のです(『書物の秩序』長谷川輝夫訳)。

このような問題意識を出発点として、私は中世英文学を書物文化史の観点から研究しています。具体的には、15世紀から16世紀初頭のイングランドにおいて、作品が写本や印刷本を媒介としてどのように生成され、伝播し、読者に受容されていったのかについて考えてきました。中世ヨーロッパの書物生産は手書きによるものが基本でしたが、15世紀半ばに入ると活版印刷術が登場しました。かつては活版印刷術の誕生は「印刷革命」と称され、写本文化とは断片的に捉えられていました。しかし初期の印刷本には中世写本の伝統が色濃く継承されています。私は両方を視野に入れ、それらをマテリアリティとテキストの面から分析し、書物生産の実際や作品受容の理解、書物を通して社会や宗教の変化を読み解くことを試んでいます。

現在は13世紀後半にドミニコ会士ヤコブス・デ・ウォラギネが編纂した*Legenda aurea*の英訳版*The Golden Legend*(1483/4)を研究の軸に据えています。欧米諸国とニュージーランドの図書館に出かけて資料の調査を重ね、時にはデジタル技術も援用し、その成果の一部をイギリスから校訂版としても出版します。こうした現地調査の過程において、海外の諸研究機関で多くの友人との出会いに恵まれたことも、私にとって大切な宝です。地道に事例研究を積み重ね、断片的だった情報を有機的に結びつけることで、写本と印刷本文化の併存・移行期における書物をめぐるネットワークを立体的に描き出していきたいと考えています。



プリンストン大学シャイデ図書館にて同館所蔵の『黄金伝説』を閲覧

超自然主義と超現実主義

19世紀後半の作家個別研究に一貫して取り組んでいますが、私のこれまでの研究活動を導いてきたのは学部生のころに抱いていたシュルレアリスム(超現実主義)に対する関心です。シュルレアリスムの主導者であったアンドレ・ブルトン**は**、19世紀には「社会的なものにせよ精神的なものにせよ、与えられた生を拒否する態度」があるとして、シュルレアリスムが掲げる革命思想の源流にロートレアモンとランボーを位置づけます。当時の私は、シュルレアリスムを理解するためにはこの二人の詩人を徹底的に読み解く必要があると悟り、ロートレアモンやランボーのテキストと格闘を繰り返します。しかし、語られる言葉のインパクト以上に「難解さ」の暗闇に打ちのめされるばかりでした。ロートレアモン『マルドロールの歌』の作品構造を「語り」と「誘惑」の観点から分析した博士論文は、その暗闇に光を照らす試みがもたらした成果といえます。

ロートレアモンに次いで研究対象としたのは、ブルトンが精神的な意味で「いちばん縁の浅からぬ相手」としている小説家ユイスマンスです。研究を進める過程で、自然主義の作家として出発したユイスマンスにおいては、レアリスムが神秘的なものと通底していること、とりわけ、美術批評のなかで絵画という「可視なもの」とそれとは対立するはずの「不可視なもの」との関連性がつねに強調されていることに着目しました。写真の登場とともに、レアリスムは視覚的現実(可視)と心的現実(不可視)の双方に関わる複雑な問題となっていくますが、ボードレールの美術批評を研究の射程に入れるようになったのは、ユイスマンスがまさにその問題をボードレールから継承しているからです。ボードレールが『1859年のサロン』で写真批判に続けて展開する想像力論は、想像力を「諸能力の女王」、すなわち外界(自然)から受ける諸々の知覚を統御する機能として定義しながら、視覚的な再現にすぎない静態的レアリスムを否定し、力動的レアリスムの可能性を示唆しています。

こうしたレアリスムをめぐる議論を集約するものが、ボードレールのいう「シュルナチュラリスム(超自然主義)」にほかなりません。それが20世紀のシュルレアリスムと無縁ではないことは明らかで、その二つを美術論の枠組みのなかで比較検討することが今後の研究課題です。



仏文学専攻
築山 和也 教授

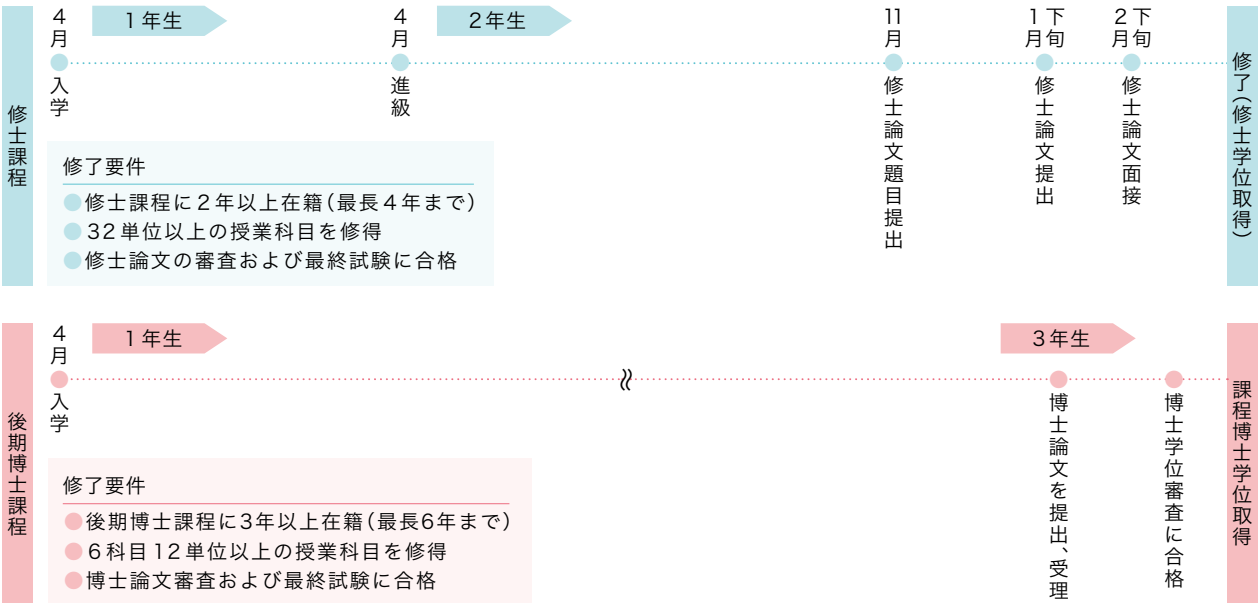
科学研究費(学術振興会)の採択課題

氏名	採択年度	研究種目	研究課題名
山口 徹	2024	学術変革領域研究(A)	環境とヒトの相互構築史：汎太平洋の比較研究による文理統合的研究(人間と環境班)
平井 靖史	2024	基盤研究(B)	ペルクソンにおける時間思想の多元的展開
小平 麻衣子	2024	基盤研究(C)	近代日本文学をめぐる〈批評〉概念の再審と女性批評史の構築
安形 麻理	2024	基盤研究(C)	西洋活版印刷術黎明期における活字鑄造技術の基礎的研究
安藤 広道	2024	基盤研究(C)	戦争遺跡における多元的視点に開かれた公共考古学的研究
中島 圭一	2024	挑戦的研究(開拓)	中世農業生産・流通量推計方法の構築
徳永 聡子	2024	国際共同研究加速基金(海外連携研究)	中世イギリス文学における古典期聖女伝のテキスト伝播と受容の研究
中島 圭一	2023	基盤研究(B)	実証的な中世マクロ経済推計モデル構築に向けた基礎研究
池谷 のぞみ	2023	基盤研究(C)	知識の社会的配分における倫理的要請：図書館の健康医療のコレクションマネジメント
糸川 麻里生	2023	基盤研究(C)	ゲーテ形態学的生命論の研究
大串 尚代	2023	基盤研究(C)	19世紀アメリカ女性文学の系譜形成：歴史、移動、シンパシー
望月 典子	2023	基盤研究(C)	ニコラ・ブッサンと宗教図像——カトリック改革期のフランス宗教画に関する多角的研究
徳永 聡子	2022	基盤研究(B)	キャクストン版『黄金伝説』『聖人伝の部』の本文研究と校訂版の作成
後藤 文子	2022	基盤研究(C)	デザイン論としてのドイツ改革庭園研究
原田 範行	2022	基盤研究(C)	近代英文学における環大西洋的視点構築のための実証的・統合的研究
平田 栄一朗	2021	基盤研究(B)	シアトロクラシーとデモクラシーの交差——演劇性と政治性の領域横断研究
佐藤 孝雄	2021	基盤研究(B)	日本列島に棲息したオオヤマネコに関する学際的調査・研究
小川 剛生	2021	基盤研究(C)	菟玖波集の全注釈による、古連歌古俳諧に見る中世社会の慣習風俗についての研究
赤江 雄一	2020	学術変革領域研究(B)	托鉢修道会の司牧革命におけるメディアの総合的研究
合山 林太郎	2020	基盤研究(C)	集団形成と古典知の継承を視座とする近代日本漢文学の研究—政治家の作品を中心に—
小平 麻衣子	2020	基盤研究(C)	日本的ファンシーをめぐる1970年代の女性文化再編の研究—サンリオ出版を中心に
安藤 広道	2020	基盤研究(C)	アジア太平洋戦争期の戦争遺跡における公共考古学的研究
安形 麻理	2018	基盤研究(B)	初期印刷文化における「書物のあるべき姿」の変容の総合的な解明
エアトル ヴォルフガング	2018	基盤研究(C)	The hidden connection between Kant and scholasticism
望月 典子	2018	基盤研究(C)	ニコラ・ブッサンの視覚論 - 近世フランスにおける「タブロー」の成立と展開
後藤 文子	2018	挑戦的研究(萌芽)	クロス・ディシプリナリー学としての「庭園芸術学」の構築

(2024年12月現在、過去7年間)

学位

学位取得のプロセス



学位授与数^[2025年4月1日現在]

修士						
年度	学位	哲学	美学	史学	文学	日本語教育学
2022		5	8	10	11	2
2023		8	5	11	17	3
2024		9	2	9	15	1
図書館・情報学						

博士					
年度	学位	哲学	美学	史学	文学
2022		2	0	4	5
2023		2	0	0	4
2024		1	2	0	10
図書館・情報学					

修士論文・博士論文のテーマ^(最近のものより抜粋)

修士論文	博士論文
● カント『道德の形而上学の基礎づけ』第三章における演繹の実相 ● イスタンブル1955年9月6－7日事件における民衆の行動と論理 ● ポスト・イコノクラスム期のビザンツ歴史叙述 ―テオファネス『年代記』とニケフォロス『簡約歴史』 ● 三浦半島海蝕洞窟における弥生時代人の動物資源利用 ―間口A洞窟及び白石洞窟出土脊椎動物遺体群の分析を中心に― ● 語種の異なる類義語に関する研究 ―「コントロール」と類義関係にある漢語を中心に― ● 李白の詩文における『莊子』の典故使用について ● Imagination, History and Antiquarianism: Joseph Strutt and Images of the English Past ● Der Zauberberg als Bildungsroman hermetisch- alchemistischer Art ● 1920年代フランスにおける俳諧受容とポエジー	● 幸田露伴研究――近代日本の言説空間の中で ● 運動表象の哲学 ● 法的言語実践への社会認知的アプローチ：商標言語学の試み ● 中世「白居易文芸」の研究―言説形成と絵画表象― ● 中世和歌の文献学的研究――歌書の機能と本文―― ● 黄昏のナボコフ――虚構と現実におけるゲーム的存在論 ● クリストファー・マーロウを文脈化する ―彼の生涯、戯曲、神話に関する研究 ● 共感の社会的生成： 絵本の読み聞かせを通した言語社会化の対照分析 ● フォトディナミズムの理論と実践 A・G・ブラガーリア 『未来主義フォトディナミズム』の総合的研究と作品総目録 ● ルートヴィヒ・ヒルシュフェルト＝マックの色彩研究 ―バウハウスをめぐる色彩論再考―

進路・留学

文学研究科修了生の進路

大学院文学研究科における過去5年間の修士課程修了者は約300名、後期博士課程修了者は約50名にのびります。それぞれが自分の専門的知識とスキルを活かして様々な道に進んでいます。

例年、修士課程修了者のおよそ3分の1が、続けて後期博士課程へ進学しています。修士課程を修了して社会へ出た人の進路としては、中学校・高等学校の教員(社会、国語、英語など)、博物館・美術館の学芸員、出版社・新聞社・放送局などマスコミへの就職が一般的です。また、語学や情報処理の専門的知識を活かし、一般企業へ就職する人もいます。

後期博士課程修了者・単位取得退学者のうち、ほぼ半数が国内の大学で専任の研究職についていますが、なかには海外の大学の専任者として教鞭を執っている人もいます。大学などの非常勤講師や研究員となったケースも含めると、ほとんどが研究を続けています。また、博物館・美術館の学芸員、高等学校の教員、新聞社や出版社に就職した人も数多くいます。

また、大学院文学研究科は留学にも力を入れています。慶應義塾大学には、130をこえる海外の大学・大学院と交換留学制度があります。多くの学生が、これらの制度を利用して、また、世界各国の国費留学制度を利用するなどして、在学中や修了後に留学しています。

文学研究科修士課程修了者の主な就職先^(2021年度～2023年度修了者)

アクセンチュア株式会社、コベルコシステム株式会社、トップ産業株式会社、パースホルディングス株式会社
パシフィックコンサルタンツ株式会社、パナソニックホールディングス株式会社、ブレンバンク株式会社
ホワイト&ケース外国法事務弁護士法人、むすびず株式会社、茨城県、学校法人桐朋学園、学校法人高宮学園、学校法人国際基督教大学
学校法人国立音楽大学、学校法人山脇学園、学校法人駿臺学園、学校法人潤徳学園、学校法人順天堂、学校法人真言宗洛南学園
学校法人星美学園、学校法人跡見学園、学校法人東京女学館、学校法人東邦大学、学校法人白百合学園、学校法人法政大学
楽天グループ株式会社、株式会社NEXT EDUCATION、株式会社アルテナカ、株式会社インタージ、株式会社エムアールエム・ワールドワイド
株式会社みずほ銀行、株式会社やる気スイッチグループ、株式会社レイヤーズ・コンサルティング、株式会社集英社、株式会社図書館流通センター
株式会社大垣書店、株式会社中央経済社ホールディングス、株式会社日本総合研究所、株式会社日立コンサルティング
株式会社日立ソリューションズ、株式会社福音館書店、株式会社両備システムズ、公益財団法人東京都歴史文化財団、国土交通省、埼玉県
三菱商事株式会社、静岡県、千葉県、大日本印刷株式会社、東急不動産株式会社、東芝インフラシステムズ株式会社
独立行政法人国立文化財機構、日本工営株式会社、日本住宅ローン株式会社、日本電気株式会社、北海道、有限責任監査法人トーマツ

文学研究科 留学先国・地域別一覧^(2013年度～2024年度)

国・地域別	大学名	国・地域別	大学名
中国	廈門大学、復旦大学、南京師範大学、山東大学	スイス	チューリッヒ大学、ザンクトガレン大学
台湾	国立政治大学	スペイン	バスク大学、マドリード自治大学
大韓民国	延世大学	ドイツ	ヴェルツブルク大学、ジーゲン大学、テュービンゲン大学
シンガポール	シンガポール国立大学		ハインリヒ・ハイネ大学、ハノーバー大学、ハレ大学
タイ	チュラロンコン大学	フランス	ボン大学、ギーセン大学、ベルリン自由大学
トルコ	イスタンブル大学、イスタンブル5月29日大学		ベルリン・フンボルト大学、ライプツィヒ大学
イギリス	エディンバラ大学、オックスフォード大学	ベルギー	社会科学高等研究院
	サウサンプトン大学、ユニバーシティ・カレッジ・ロンドン		ソルボンヌ大学、トゥールーズ・ジャン・ジョレス大学
	ヨーク大学、リヴァプール大学	アメリカ合衆国	ナンテール大学、パリ第1大学、パリ第3大学
	ロンドン大学キングズ・コレッジ		パリ第4大学、パリ第10大学
イタリア	ロンドン大学クイーン・メアリー校		ボルドー・モンテニュ大学
	ロンドン大学パークベック校		
	ロンドン大学アジア・アフリカ研究院		
オーストリア	ポーロニャ大学、サクロ・クオーレ・カトリック大学		
	バドヴァ大学、フィレンツェ大学		
	ローマ・ラ・サピエンツァ大学		
	ウィーン大学		

2024年度 文学研究科留学生 在籍者国・地域別人数

● 中国 16名	● ロシア連邦 2名	● イタリア 1名	● フランス 1名	● ポーランド 1名	● 台湾 1名
----------	------------	-----------	-----------	------------	---------

学費・奨学制度ほか

文学研究科 学費（2025年度参考、2026年度の学費は変更になる場合があります。）

修士課程				後期博士課程			
合計	在籍基本料	授業料	その他の費用※	合計	在籍基本料	授業料	その他の費用※
1,104,200円	70,000円	1,030,000円	4,200円	784,200円	70,000円	710,000円	4,200円

※文学研究科は「その他の費用」の一部として、所属する専攻の研究会会費・雑誌購読料を各々徴収します（表中には含まれていません）。

大学院向け奨学制度

成績・人物ともに優秀な学生で、研究の意欲を持ちながらも、経済的な理由により修学が困難な学生を対象に、慶應義塾大学大学院では、次のような奨学制度を設けています。詳しくは、本学ウェブサイトをご覧ください。

- ・日本国籍等の学生対象：https://www.students.keio.ac.jp/com/scholarships/apply/form.html
- ・外国人留学生対象：https://www.ic.keio.ac.jp/intl_student/scholarship/intl_student.html

奨学金名		種別	金額(前年度実績)	対象者(※1)	期間
学内	慶應義塾大学大学院奨学金	給付	年額500,000円または600,000円(金額は研究科で異なる)	日本国籍等の学生 外国人留学生	1年
	慶應義塾大学修学支援奨学金	給付	学費の範囲内(平均支給額：年額約300,000円)	日本国籍等の学生 外国人留学生	1年
	研究のすゝめ奨学金 (申請時期・条件等は研究科で異なる)	給付	年額300,000円・500,000円・700,000円(金額は研究科で異なる)	研究科で異なる	1年
	小泉信三記念大学院特別奨学金	給付	月額30,000円	日本国籍等の学生 外国人留学生	1年
	未来先導国際奨学金(入学前申請)	給付	学費全額、生活費月額200,000円 渡航費補助を含む留学準備一時金150,000円	外国人留学生	※2
学外	各種指定寄付奨学金 (詳細は上記ウェブサイトをご参照下さい。)	給付	年額100,000円～学費の範囲内	日本国籍等の学生 外国人留学生	1年
	日本学生支援機構奨学金 第一種奨学金(貸与無利子)	貸与	修士課程 月額50,000円または88,000円 後期博士課程 月額80,000円または122,000円	日本国籍等の学生	標準修業年限
	日本学生支援機構奨学金 授業料後払い制度(貸与無利子)	貸与	授業料相当額の奨学金：最大776,000円に保証料相当額を加えた金額 生活奨学金：20,000円、40,000円から選択(希望者のみ)	日本国籍等の学生 (修士課程のみ)	標準修業年限
	日本学生支援機構奨学金 第二種奨学金(貸与無利子)	貸与	月額50,000円・80,000円・100,000円・130,000円・150,000円 (金額は本人が選択)	日本国籍等の学生	標準修業年限
	文部科学省外国人留学生学習奨励費	給付	月額48,000円	外国人留学生	1年以内
民間団体・地方公共団体の各種奨学金 (詳細は上記ウェブサイトをご参照下さい。)		給付 貸与	奨学団体の規定による	日本国籍等の学生 外国人留学生	奨学団体による

日本学生支援機構「特に優れた業績による奨学金返還免除」修士課程内定制度については下記ウェブサイトをご参照下さい。
https://www.students.keio.ac.jp/com/scholarships/mmenjo.html
金額等については変更することもあります。詳細は本学ウェブサイトで確認して下さい。
※1 対象者の「日本国籍等の学生」には、外国籍の場合、永住者・定住者等の在留資格を有する者を含む。また、「外国人留学生」とは、在留資格「留学」を有する者。
※2 原則、修士課程は2年間、博士課程・専門職学位課程は3年間を上限とする。

上記以外に「慶應義塾大学教育ローン制度」が設置されています。
＜慶應義塾大学教育ローン制度＞ 学生または保護者などが、提携先金融機関から学費を借り入れる学費ローンです。融資条件等は金融機関により異なり、申請は大学を通さず直接金融機関で行っていただきます。

教育訓練給付制度

https://www.hellowork.mhlw.go.jp/insurance/insurance_education.html

文学研究科修士課程図書館・情報学専攻情報資源管理分野は、厚生労働省教育訓練給付制度の専門実践教育訓練給付金の対象講座に指定されています。

留学生宿舍

https://www.ic.keio.ac.jp/intl_student/housing/ryu_boshu.html

慶應義塾大学に在学する外国人留学生(在留資格が「留学」)を対象に、年2回留学生宿舍の入居者を募集しています。募集案内は1月と7月に上記ウェブサイトに掲載します。入居時期は3月下旬または9月中旬で入居期間は最長1年(2学期間)です。ただし、湘南藤沢キャンパス周辺の学生寮については、条件を満たした学生は審査のうえ入居期間の延長が認められることがあります。

【三田・日吉キャンパス周辺の学生寮】				
宿舍名	形態	寮費※	個室の広さ	最寄り駅
下田学生寮	単身用	63,500円	16㎡	東急・横浜市営地下鉄 日吉駅 徒歩13分
綱島学生寮	単身用	78,000円	15.99～17.22㎡	東急 綱島駅 徒歩7分／東急 新綱島駅 徒歩9分
プラム・イズ	単身用	68,300円	18㎡	JR 新川崎駅 徒歩16分
大森学生寮	単身用	69,200円	12.28㎡	京急 梅屋敷駅 徒歩12分／JR他 蒲田駅 徒歩15分
元住吉宿舍	単身用	69,000円	23.5㎡	東急 元住吉駅 徒歩10分／東急・横浜市営地下鉄 日吉駅 徒歩8分
日吉国際学生寮	1ユニット=4個室+共用施設	72,000円	ユニット64.44㎡、うち個室部分9.25～10.21㎡	東急・横浜市営地下鉄 日吉駅 徒歩18分／日吉キャンパス 徒歩10分
綱島 SST国際学生寮	単身用	79,600円	17.40～18.85㎡	東急 綱島駅 徒歩10分／東急 新綱島駅 徒歩10分 東急・横浜市営地下鉄 日吉駅 徒歩15分
元住吉国際学生寮	単身用	75,700円	14.06～14.17㎡	東急 元住吉駅 徒歩8分
高輪国際学生寮	単身用	74,000円	12.43～13.24㎡	都営他 泉岳寺駅 徒歩7分／JR 高輪ゲートウェイ駅 徒歩11分 東京メトロ他 白金高輪駅 徒歩14分

【湘南藤沢キャンパス周辺の学生寮】				
宿舍名	形態	寮費※	個室の広さ	最寄り駅
湘南藤沢国際学生寮	単身用	64,500円	14.47～14.72㎡	小田急他 湘南台駅下車 バス慶応大学行き10分
H(イータ)ヴィレッジ	1ユニット=5個室+共用施設	78,000円	ユニット82.62㎡、うち個室部分8.38㎡	小田急他 湘南台駅下車 バス慶応大学行き10分

※Hヴィレッジ以外の学生寮は、入寮時に別途清掃維持管理費20,000円がかかります。なお、家賃は必要に応じて改定されることがあります。 2025年4月1日現在

入試日程・入試データ

2026年度 文学研究科 入試日程一覧

（一般入試）

一般入試	秋期 修士	春期 修士／後期博士
出願登録(インターネット)	2025/7/1～7/11	2025/12/15～12/25
出願書類の郵送期間	2025/7/8～7/11	2025/12/22～12/25
第1次試験(筆記試験)	2025/9/9	2026/2/24
第1次試験 合格発表	2025/9/10	2026/2/25
第2次試験(口頭試問)	2025/9/11	2026/2/26
合格発表	2025/9/11	2026/2/26
入学手続期間	2026/3/2～3/6	

文学研究科 志願者・合格者数

（過去3年間の一般入試、外国人留学生入試の総計です。）

※外国人留学生入試は、2025年度から一般入試に統合されました。

		2023年度		2024年度		2025年度	
専攻	定員	志願者	合格者	志願者	合格者	志願者	合格者
哲学・倫理学	10	27	13	28	16	20	9
美学美術史学	25	10	2	21	10	19	9
史学	20	23	12	33	15	16	9
国文学	20	34	8	24	8	55	12
中国文学	5	7	1	12	3	16	1
英米文学	15	10	7	8	6	17	12
独文学	10	4	2	6	5	1	0
仏文学	10	7	3	6	2	2	2
図書館・情報学	20	10	3	11	5	20	12

		2023年度		2024年度		2025年度	
専攻	定員	志願者	合格者	志願者	合格者	志願者	合格者
哲学・倫理学	6	5	3	8	6	10	7
美学美術史学	6	3	3	1	1	1	0
史学	10	6	4	4	1	4	1
国文学	6	1	1	1	0	3	1
中国文学	2	1	0	2	0	1	1
英米文学	5	12	9	10	7	5	3
独文学	3	2	2	2	1	1	1
仏文学	2	2	0	1	0	2	2
図書館・情報学	5	2	1	2	2	4	3

入試要項・過去問題閲覧方法

入試試験要項は、以下のウェブサイトに掲載されております。

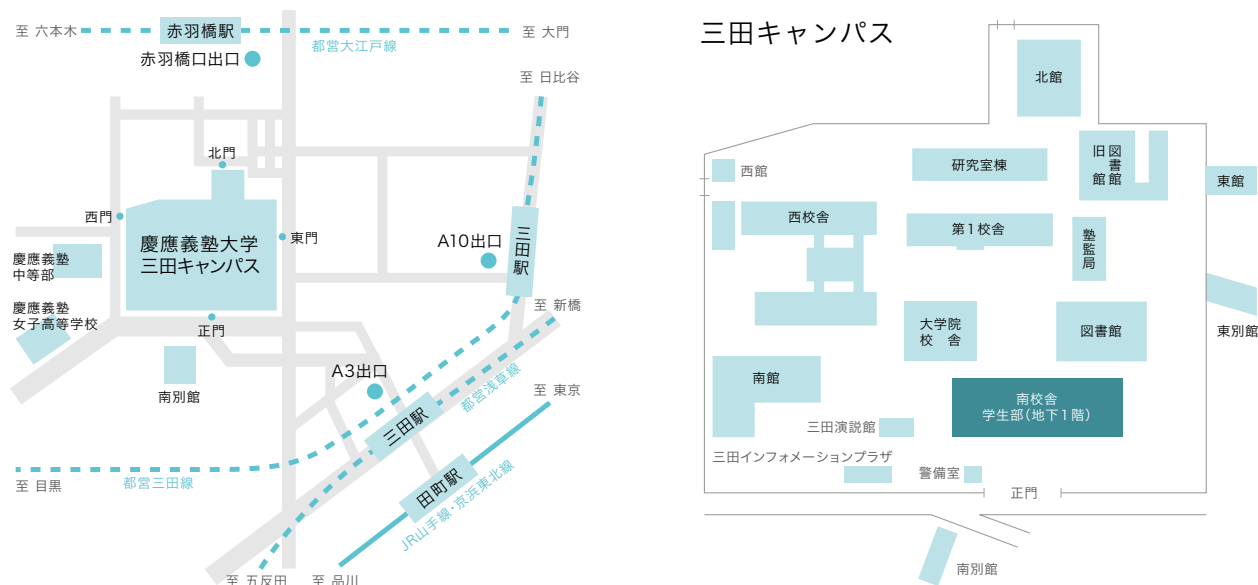
【一般入試 修士課程】https://www.keio.ac.jp/ja/grad-admissions/masters/gsl/

【一般入試 後期博士課程】https://www.keio.ac.jp/ja/grad-admissions/doctoral/gsl/

過去問題は文学研究科が開示可能と判断した部分について、以下のウェブサイトで公開しています。

【過去問題閲覧方法】
(修士課程) https://www.keio.ac.jp/ja/grad-admissions/masters/past-exams/
(後期博士課程) https://www.keio.ac.jp/ja/grad-admissions/doctoral/past-exams/

Access Information



交通アクセス

● JR 山手線・京浜東北線 田町駅下車 (徒歩8分) ● 都営浅草線・都営三田線 三田駅下車 (徒歩7分) ● 都営大江戸線 赤羽橋駅下車 (徒歩8分)

主要駅からのアクセス



.....

慶應義塾大学 大学院案内 2026 文学研究科

〒108-8345 東京都港区三田 2-15-45
<https://www.keio.ac.jp/>

お問い合わせ

学生部文学研究科担当 (南校舎地下1階)
03-5427-1555
mita-bun@adst.keio.ac.jp

慶應義塾大学 大学院 文学研究科

検索

<https://www.gsl.keio.ac.jp/>



Keio University

